

令和2年産水稻の生産振興基本方針

I 基本方針

米をめぐる情勢は、米政策の見直しや消費量の減少等により、産地間競争がますます激しくなっており、本県産米の需要量の確保と多様なニーズに応じた米生産が求められている。

こうした中、「富山米」が消費者や実需者に高く評価されていくためには、高品質で食味の良い米づくりを一層進める必要がある。

このため、令和2年産米においては、「ほおぼる幸せ。富山米」をスローガンとして、重点技術対策や地域の課題に応じた対策に加え、適正な品種構成への誘導などにより、高温等の気象変動に打ち勝つ米づくりに取り組む。また、低コスト化や安全・安心の確保などの総合的な対策を講じ、「元気な富山米ブランド」の確立を図る。

II 重点推進事項

【推進目標】 「元気な富山米ブランド」の確立 ～ほおぼる幸せ。富山米～

1 高温に打ち勝つ米づくり ⇒ ・うるち米1等比率 90%以上	・整粒歩合 80%以上 ・玄米蛋白含有率 6.4%以下 ・玄米水分 14.5~15.0%
2 低コストな米づくり ⇒ ・水稻直播栽培面積 4,000haに誘導	
3 「安全・安心」な米づくり ⇒ ・「とやまGAP」の実施、生産履歴記帳率100%	

1 多様なニーズに対応した県産米の品揃えの充実

【主食用米】

- ・本県のトップブランド米として「富富富」を位置づけ、生産者登録制による高品質・良食味の確保や生産拡大を図り、ブランド化を推進
- ・「コシヒカリ」については、高温等の気象変動に対応した技術の徹底により、安定した高品質・良食味を確保し、ブランド力を向上
- ・需要が堅調な業務用米では、気象変動に強い「てんたかく」「てんこもり」を中心に、低コスト・安定生産を推進

【非主食用米】

- ・飼料用米、米粉用米、輸出用米等の新規需要米や加工用米については、実需者とのマッチングを図るとともに、大麦あと水田の有効活用など効率的な生産を推進

2 高温に打ち勝つ米づくり

(1) コシヒカリ偏重の是正

- ・高温条件でも品質が安定している「てんたかく（「てんたかく」を一部改良した新品種「てんたかく81」へ全面切換え）」「富富富」「てんこもり」の作付推進
- ・労働力や機械・施設能力等に応じた、適期作業が可能な品種構成への誘導
- ・品種構成は、担い手を中心に、早生20：中生60：直播コシ10：晩生10を目標に誘導

(2) 出穂後の高温の回避

- ・「コシヒカリ」栽培における**5月15日を中心とした田植え**の確実な実施
- ・「コシヒカリ」の直播栽培の推進による作期幅の拡大

(3) 高温に打ち勝つ環境づくり

- ・秋耕による稲わらの腐熟促進と深耕による根域の確保
- ・有機物や土壌改良資材の確実な施用と地力増進作物の積極的な作付け
- ・畦畔雑草の管理等によるカメムシ類の発生・増殖防止と、適正な防除の徹底等による**斑点米の発生防止**

(4) 高温に打ち勝つ稲体づくり

- ・健苗の70株植え等による適正穂数の確保と、田植後1か月までの中干し開始による根の健全化と**過剰な穂数の防止**
- ・出穂後20日間の湛水管理による、**稲体活力の維持**
- ・土壌診断に基づく基肥施用と生育や気象状況に応じた追肥の実施

3 低コストな米づくり

- ・ICTやロボット技術を活用した農機やシステムの現地実証等によるスマート農業の推進
- ・直播栽培などの低コスト・省力技術の普及拡大
- ・担い手への土地利用集積や農地の大区画化等による作業の効率化や、施設・機械の効率的な利用等による生産費の削減

4 「安全・安心」な米づくり

- ・県適正農業規範に基づくGAPや認証GAP及び生産履歴記帳の推進、農薬使用基準の遵守と周辺への飛散防止
- ・農薬の使用量低減や化学肥料の使用量適正化の推進と温湯種子消毒などの環境にやさしい技術の活用
- ・農薬の危害防止や農作業事故の防止、熱中症対策等の農作業安全を推進

III 推進対策

- 1 県米作改良対策本部生産部会において、重点推進事項等を策定するとともに、「元気な富山米」総点検運動を展開し、気象変動に応じた迅速な情報発信と技術対策の徹底を図る。また、各地域の課題解決に向けた取組みを支援するとともに、重要課題には県全域で「運動」を展開する。
- 2 各地域では、農業技術者協議会などを中心に土地改良区などとも連携し、地域に応じた対策を講じるとともに、迅速かつ適切な指導に努める。
- 3 県内外の消費地の動向を把握するとともに、生産情報の提供を通じて、消費者・実需者の評価向上に努める。

イ 美味しい「コシヒカリ」の移植栽培基準例

540kg穫り収量構成の目安

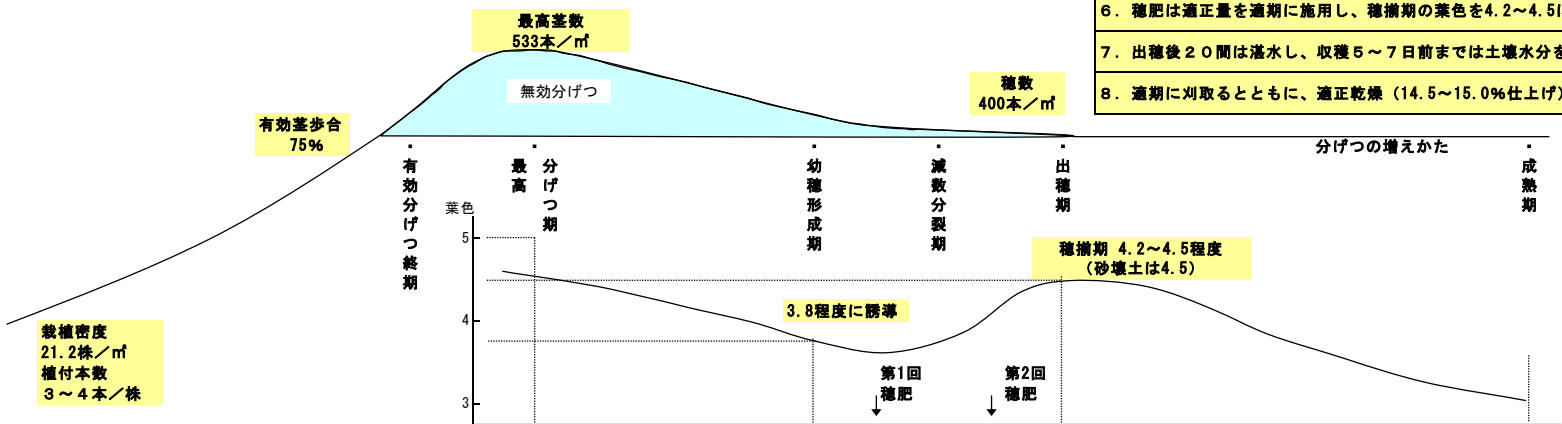
収量構成	目安
㎡当たり最高莖数 (本)	533
有効莖歩合 (%)	75
㎡当たり穂数 (本)	400
平均一穂粒数 (粒)	70
㎡当たり着粒数 (百粒)	280
登熟歩合 (%)	87
玄米千粒重 (g)	22.5

土壌区別施肥設計 (kg/10a)

土壌区分		窒素施用量			三要素合計		
		基肥 (側条施肥)	出穂15日前	出穂8日前	窒素	リン酸	カリ
沖積	CL	1.8~2.6	1.5	1.5	4.8~5.6	7.0~9.0	8.0~12.0
	L	2.4~3.6	1.5	1.8	5.7~6.9		
	SL	3.0~4.0	1.5	2.0	6.5~7.5		
洪積	L~CL	2.4~4.5	1.5	1.8	5.7~7.8		

栽培のポイント

- 育苗日数20日間、ハウスの温度管理に注意して、健苗を育成する。
- 5月15日を中心として、好天日に田植えを行う。
- 株数は、坪当たり70株を植え、良質の茎を早く確保する。
- 適正な中干しにより根の活力を高めるとともに、過剰分けつを防ぐ。
- 幼穂形成期の葉色を3.8に誘導し、以降は飽水管理で葉色低下を防ぐ。
- 穂肥は適正量を適期に施用し、穂揃期の葉色を4.2~4.5に誘導する。
- 出穂後20間は湛水し、収穫5~7日前までは土壌水分を維持する。
- 適期に刈取るとともに、適正乾燥(14.5~15.0%仕上げ)に努める。



月日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
4/25		5/15	6/15	7/13	8/5	9/13	
生育区分	育苗期	田植期	活着期	有効分けつ期	無効分けつ期	幼穂形成期 ~穂ばらみ期	登熟期
水管理		やや深水	浅水管理	中干し	間断かん水	飽水管理 (足跡の水が切れないように管理する)	出穂から20日間は湛水管理 (落水を急がないように)

栽培管理のポイント

- 排水溝を掘る。稲わらの腐熟を促進するため、秋耕を行い、必ずを施すなど、地力増強に努める。
- ケイ酸石灰は一〇アル当たり一〇〇〜二〇〇g
- ・九ミリのふるいで選別する。
- を厳守し、胴割米や過乾燥米の発生を防止する。
- ・適正な乾燥速度と仕上げ水分十四・五〜十五・〇%の黄化率八五〜九〇%程度で適期に刈取る。
- ・刈取り予定日の五〜七日前までかん水する。
- ・フエーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。
- ・出穂から二十日間は湛水状態を保つ。
- ・カメムシ類は穂揃期防除を中心に確実にを行う。
- ・穂いもちは出穂直前と穂揃期に二回防除する。
- ・穂揃期の葉色を四・二〜四・五に誘導する。
- ・穂肥は出穂十五日前とその七日後に二回施用する。
- ・幼穂形成期以降は飽水管理を行う。
- ・幼穂形成期の葉色は三・八程度に誘導する。
- ・過剰分けつを抑制する。
- ・適正な中干しにより、根の活力を高めるとともに、効率化を図る。
- ・六月一月中旬から溝漉りを行い、水のかん排水の確保する。
- ・株数は坪当たり七十株を植え、良質の茎を早く確保する。
- ・基肥量は地区基準量を守る。
- ・五月十五日を中心とした田植えを確実に実施する。
- ・活着後は浅水管理として分けつの発生を促す。
- ・田植後はやや深水として活着を早める。
- ・深さに植える。
- ・一株の植付け本数は三〜四本とし、三cm程度の確保する。
- ・葉いもち予防のため苗箱施肥を行う。
- ・育苗ハウスが二十五度以下になるよう管理する。
- ・播種量は一箱当たり一〇〇g以下とする。
- ・二十日間を目安とする。
- ・播種日は四月二十五日を中心とし、育苗日数は十分に浸種して芽出しを確実にを行う。
- ・田面の均平を図る。
- ・ゆつくりと耕起し、作土十五cm以上を確保する。